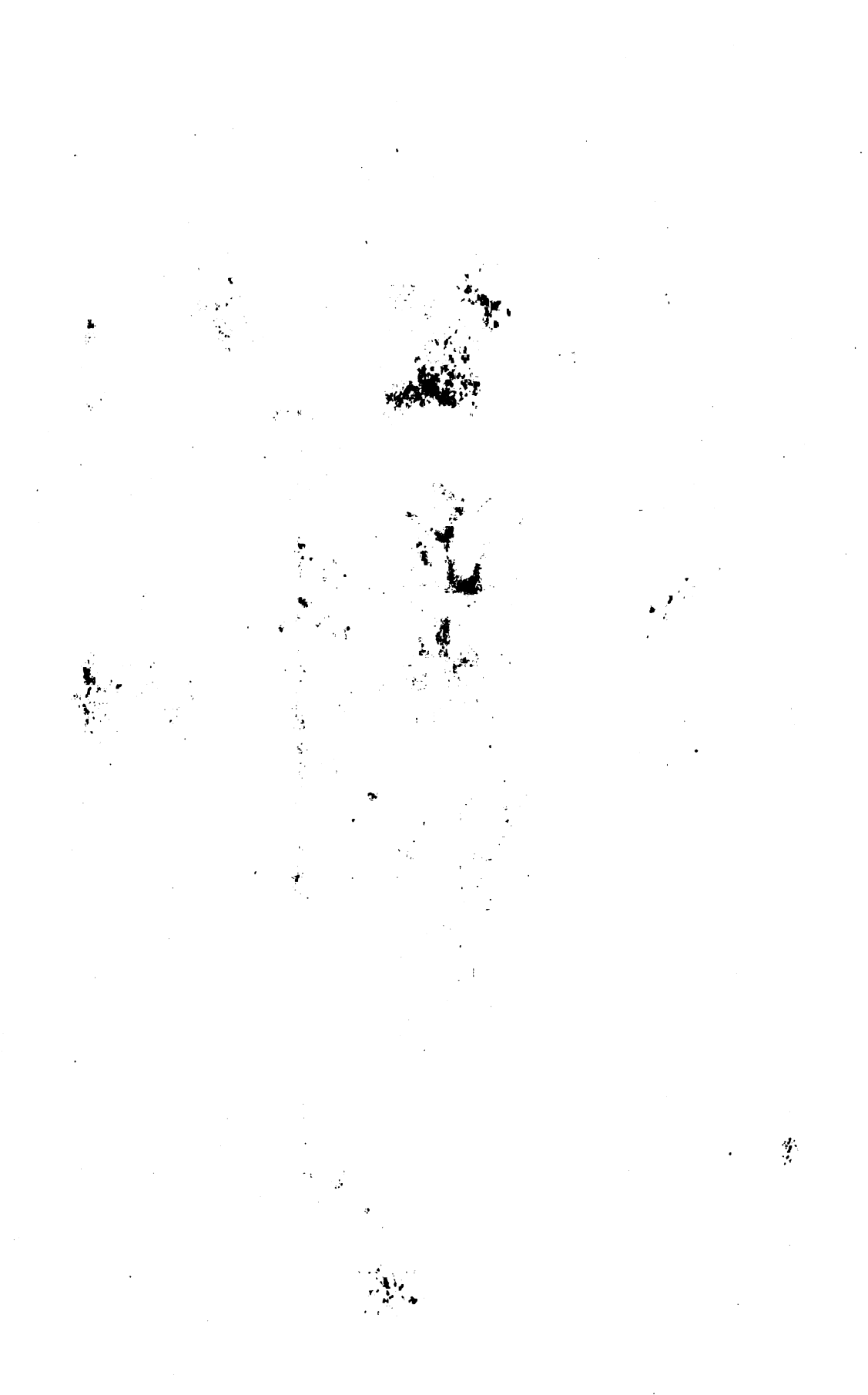


近世語彙



## 序

私は四歳の時に父を失ひ、母の手で教育をされた。私の母の兄に舊和歌山藩士近藤正純といふ人があつて、われわれを東京へ引取つて萬端の世話を焼いてくれた。この伯父は舊幕時代には浮世繪を好んで習ひ、御維新後には武人の籍を離れて洋畫の先生になつて、陸軍教導團に勤めて教鞭を執つてゐた。この伯父が繪畫の趣味を持つてゐたからでもあらうが、芝居が非常に好きで、續いて稗史小説なども頗る好きであつた。さういふ點から、始終伯父の家に入出入する私は十歳前後から芝居見物のお供をするやうになり、又貸本屋の貸本は大抵讀み盡すやうになつた。附加へて申し置くが、私の母も私同様にかういふ趣味をば深く味つた人である。私は當時大學豫備門に入つて、甚だ忙しい學科の下に勉強したが、學問の傍はかういふ趣味の方に深入りした。従つて或年の如きは當時の團菊左の芝居に熱中して、一度落第させられた事もある。まだ幼稚であつた日本の文壇は、一方には坪内逍遙先生が知られて、小説神髓や當世書生氣質で文壇の改革をされようとする時期、一方には矢野龍溪先生や末廣鐵腸居士、東海散士などが政治小説を著はして、文壇の新潮流を作らうとした時期、さういふ時期に際會して、私も文壇に立つて仕事をしようといふ考を抱いたのである。當時の同志の一人たる齋藤綠雨は、中學校にも入らずに文壇に飛出した。然し私は一通りの素養を着けて文壇に出ようと覺悟を極めた。そこで明治十八年に大學の和漢文學科に入つ

て、先づ東洋文學の大體を學習しようと思つた。

然しここに私の一生涯に於ての一つの變動が起つた。それは日本國語學界の爲に身を犠牲にしようとの機會が湧いたのである。

當時故森文部大臣が日本の教育制度を改良され、國民教育を擴張されるに當り、日本の國語國文の教育が今後の教育の基礎たるべきを感じられ續いては國語國文の教育方針及び方法改良の必要を認められて、英國人チャンバレン氏を大學教師として任命され、チャンバレン氏が日本の國語國文法を教授するやうに定められた。私は日本の學生でありながらチャンバレン氏から日本文法を教はつた第一の學生である。日本人が西洋人から日本文法を教はるといふことは極めて不思議な現象ではあるが、又内心では如何なる教育をするかといふに就いて疑問を持つてゐるが、さて授業を受けると其の講義指導方針共に、日本の老先生たちより受ける所とは全く變つて面白くもあり、且有益なものであつた。私は其の時に今後の國語教育はかかる方針で改良すべきであると深く感じ、隨つてこの學科には非常に興味を感じ常に先生の許に往來して色々の指導を受けた。家庭で教を受けるに就いても、和漢學の先生が塾生を取扱ふとは變り、極めて懇篤なる待遇に感泣したことも屢であつた。

かかる次第で大學を卒業してから、日本の語學を調べる考で大學院にも入つた。然るに明治二十三年と記憶するが、其の年に故外山正一先生が私を呼ばれて、日本語研究の爲に博フイロシ言學研究に西洋

に行つて見たらよからうとの話が出た。其の時の大學總長は故加藤弘之先生で、先生は明治十四五年頃から、博言學を學んだ人に國語研究をさせねばならぬとの識論であつた。この總長と外山先生とが相談されて、私にこの重任を引受けないかとお話があつたものと察する。そこで私は深く考慮した結果、多年の自分の希望を抛棄して、日本語學の爲に盡力しようとの考となり、歐米四年間の留學も多くは博言學や國語研究の上に費した。然し私の子供の時に抱いた希望は其の後も時々胸裡に浮ぶので、例へば近松馬琴の研究なども時間さへあれば續けて見たいと思つて居た。

殊に歐洲で西洋文學の一般を視察中に、英國のシエークスピア全集に對してシエークスピアレキシコンといふものがあるのを見て、かやうな物が日本の近松馬琴などにあつて欲しいと考へた。抑も大文豪に關する研究基礎には、大文豪の抱ける思想、其の思想を構成する單語の根本的研究の必要なるは申すまでもないこと。西洋にかかる研究あるのに日本には未だない。日本で文學上の研究といへば、近代では先づ近松や馬琴などの文豪の上に想を着くべきであらう。殊に日本のシエークスピアといはれる近松の著作物からこの研究を創めて見ようとの考は常に持つて居たが、然し考のみで公私事務多端の爲に決行する時機がなかつた。

所が幸にも私はここに其の研究者を求め得た。それは實に樋口慶千代君である。樋口君は福山市の人で、明治三十五年東京帝國大學文科大學に附設され、私が主任であつた第一教員養成所の第一期生であつて、卒業後郷里福山中學教諭となつて教鞭を執られ、其の後東京帝國大學附屬圖書館

司書として和漢書部を擔任され、大正十三年以來東洋文庫研究室に在つて岩崎男爵家の和漢書取調を擔任されて居る。此の樋口君に十五年に亙る長い間種々な研究をしてもらつて、君のこの方面に於ける豊富なる學識と絶大なる精力とによつて、この本が出来ることになつた。この度これを公刊することを得るのは全く樋口君の力によつたもので、共著として名を掲げるが實際は樋口君一人の仕事であると申して差支ない。私は多年の希望が遂に成就したのを喜ぶと同時に、其の望が樋口君を咲つてでなければ遂けられなかつたことを公言するものである。

なほ終にかかる著書を喜んで出版してくれる富山房の好意を深く謝して置く。

昭和五年三月一日

上 田 萬 年

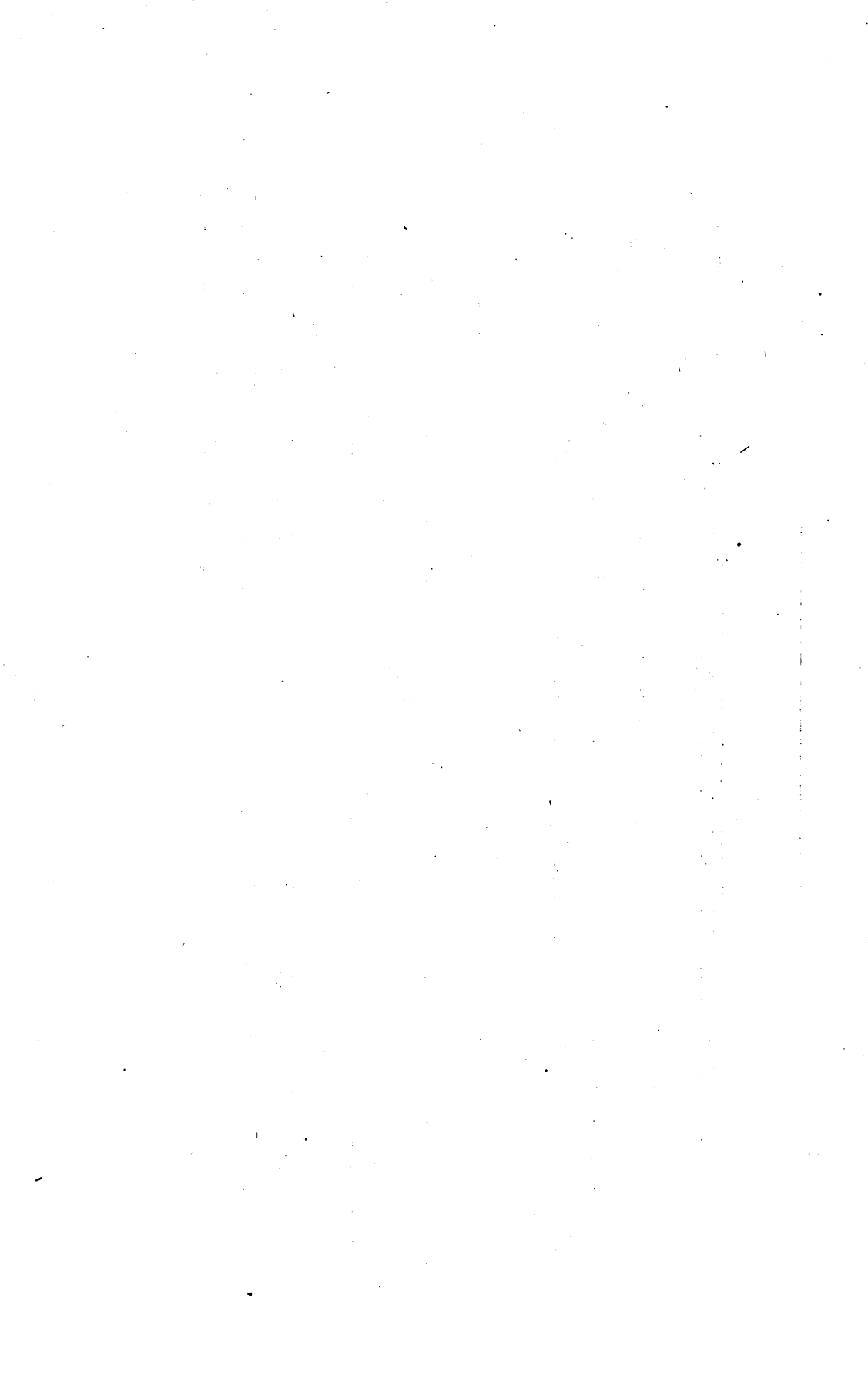
## 凡例

- 一 本書は近松巢林子の著作物全部に互つて解釋を施したものである。
- 一 語詞の排列は五十音順に従ひ、イ、キ、エ、オ、ヲ等の類音を區別した。漢語の字音に於ても亦然り。
- 一 假名遣は一般に語法上正しい式に據つたれども、古來慣用久しうして巢林子も之に據れるものは敢て改めないこととした。
- 一 同一語句の用重覆數度に及ぶものは、其の語の上に符號\*を附し、一二用例を舉げて其の出處を示し、他是省略に従うたれども、其の他のものは繁を厭はず悉く列舉した。
- 一 巢林子の文の典據、及彼の構想作文に關して前人の未だ嘗て着手されなかつた諸種の研究は、之を類別して附録した。

本書の撰述に關しては、恩師上田博士の命を奉じて専ら指導を仰ぎ、專念従事十五星霜を閲して漸く竣成を告げた。故に本書にあらはれた新研究の權威は、上田先生の深遠該博なる學識に負へるものである。今や其の成れるを喜んで由來を記し、謹んで恩師に捧ぐ。(樋口慶千代申す)

題筆 上田萬年 裝畫 小村雪岱

(背の竹本座は竹堂故事の挿畫、紋所は門左・筑後・治兵衛・きさなどの紋。廬に黨の裾襖もさんの衣裳に見えて、女用訓蒙圖彙の挿畫、また見返畫は竹本筑後・直傳七行本の山崎與次兵衛黨の門松の見返畫に據る。)





略語表

(生玉)	嘉平次 生玉心中 おきが 生玉心中
(今宮)	二郎兵衛 今宮心中 おきさき 今宮心中
(以呂波)	以呂波物語
(潤色)	あとお卯月の潤色 ひ心中
(浦島)	浦島年代記
(大磯虎)	大磯虎稚物語
(大掛物)	源頼義 大掛物十幅一對 平師氏
(大原問答)	大原問答青葉笛
(賀古教信)	賀古教信七墓廻
(娥)	娥歌がるた
(鎌田)	鎌田兵衛名所盃
(關八州)	關八州繫馬
(懸物揃)	傾城懸物揃
(蛙合戦)	傾城島原蛙合戦
(酒呑童子)	傾城酒呑童子
(反魂香)	傾城反魂香
(吉岡染)	傾城吉岡染
(兼好)	兼好法師見車
(十二段)	源氏十二段長生鳥臺
(冷泉節)	源氏冷泉節

(烏帽子折)	源氏烏帽子折
(弘徽殿)	弘徽殿鶉羽産家
(國性爺)	國性命合戦
(國性命後日)	國性命後日合戦
(歌念佛)	おなつ 五十年忌歌念佛 清十郎
(基盤太平記)	兼好法師 基盤太平記 あとおひ
(最明寺殿)	最明寺殿百人上臈
(嵯峨天皇)	嵯峨天皇甘露
(千疋犬)	相模入道千疋犬
(佐佐木)	佐佐木先陣
(薩摩歌)	源五兵衛 薩摩歌 おきん
(聖德太子)	聖德太子繪傳記
(釋迦)	釋迦如來誕生會
(川中島)	信州川中島合戦
(重井筒)	心中重井筒
(天網島)	かみや治兵衛 心中天の網島 きりの 國屋小はる
(二枚繪)	心中二枚繪草紙
(萬年草)	萬野山 心中萬年草 女人堂
(水朔日)	心中刃げ水の朔日
(宵庚申)	心中宵庚申
(扇八景)	曾我扇八景
(會稽山)	曾我會稽山

(五人兄弟)	曾我五人兄弟
(虎が磨)	曾我虎が磨
(曾根崎)	曾根崎心中
(大覺)	大覺大僧正御傳記
(大經帥)	大經帥昔曆
(唐船嘶)	唐船嘶今國性爺
(小栗判官)	當流小栗判官
(田村)	田村將軍初觀音
(丹波與作)	丹波與作待夜の小屋節
(持統天皇)	持統天皇歌軍法
(女夫池)	<small>後太平記 四十八卷目</small> 津國女夫池
(融)	融大臣
(女腹切)	長町女腹切
(西王母)	日本西王母
(振袖始)	日本振袖始
(博多)	博多小女郎波枕
(卯月袍)	ひぢりめん卯月の袍
(隅田川)	雙生隅田川
(藤靜)	藤靜胎内拵
(女護島)	平家女護島
(三國志)	本朝三國志
(用文章)	本朝用文章

(松風)	松風村雨束帶鑑
(源義經)	源義經將棊經
(冥途飛脚)	<small>忠兵衛</small> 冥途の飛脚
(袍狩)	袍狩劔本地
(壽門松)	山崎與次兵衛壽の門松
(日本武尊)	日本武尊吾妻鑑
(鑑權三)	鑑の權三重帷子
(雪女)	雪女五枚羽子板
(夕霧)	夕霧阿波鳴渡
(百合若)	百合若大臣野守鏡
(用明天皇)	用明天皇職人鑑
(女楠)	吉野都女楠
(淀鯉)	淀鯉出世瀧徳
(伊豆日記)	頼朝伊豆日記
(井筒)	井筒業平河内通
(女殺)	女殺油地獄

(其の他の物は略しない)

總目次

語彙	1
附錄	
典據解說	三九三
地名解說	五三三
人名解說	六三九
古代法	七三三
經濟	七八
動物、植物、礦物・色彩、病名、藥名、藥草の名彙	七三
巢林子略歴と著作物	七七
巢林子時代の略年表及附記。近松研究資料	七〇
檢出し難いものの索引	七九

